

第1回

子どもたちは「課題」かつ「資源」

LGBTユースの居場所にじーず代表

遠藤 まめた

えんどう まめた 1987年埼玉県生まれ。トランスジェンダー当事者としての自らの体験をきっかけに、LGBTの子ども・若者支援にかかわる。著書に『先生と親のためのLGBTガイドーもしあなたがカミングアウトされたなら』（合同出版）ほか。



マンガは娘が先に読んでいた

私は日頃、LGBTの子どもの居場所づくりをしながら、子どもにかかわる大人たちに性の多様性について知ってもらおう活動をしています。先日、ある父親がこんな話をしてくれました。

「この前、娘に『弟の夫』（田亀源五郎作）というゲイ

の人が出てくるマンガをお父さんは読んでいるんだ、と話したんですよ。そうしたら、『へえ、お父さん、そういうの関心あるんだ。私はもう三年前にそのマンガは読んだけどね』って、得意げに言われました」

講演活動をしていると、さまざまな学校を訪れます。先生方の中には「LGBTの子どもなんて、教員生活で一度も接したことはない」とおっしゃる方がいらっしやいます。そんな学校でも、私が行った授業の感想シートに中高生たちは、「私も友達からカミングアウトされたことがある」「自分の好きなYouTuberが性別を変えた人なので、前から興味を持っていた」と、それぞれの想いを書いてくれます。

LGBTとは、Lesbian（女性同性愛者）、Gay（男性同性愛者）、Bisexual（両性愛者）、Transgender（性別越境者）の頭文字をとった単語で、セクシュアル・マイノリティ（性的少数者）の総称の一つです。

二〇一六年に発表された全国調査によれば、同性同士が結婚することについて、若い世代ほど賛成する人が多く、上の世代になればなるほど反対が増えるようです。二〇一三〇代は「誰にも平等に結婚する権利がある」「愛し合っていればよい」といった意見が多く、賛成意見が72・3%を占めるのに対し、年代が上がるにつれて反対が増え、四〇代以上では「伝統的な家族

のあり方が失われる」といった意見が目立ち、六〇〜七〇代では賛成が32・3%まで減るといのです。

今の中高中生たちは、二〇代よりさらにLGBTに関する肯定的な情報に触れる機会が増えています。子どもたちの感じ方と、上の世代の価値観とはギャップがあることをまずは押さえておく必要があります。

クラスの中には、すでにテレビやマンガ、YouTubeなどで多様な性のあり方についての肯定的な情報に触れている子どもたちが一定数います。そして、思春期の子どもたちが「自分はLGBTかもしれない」と思ったとき、最初にそのことを打ち明ける相手も圧倒的に同級生の割合が高いことがわかっていきます。つまり、どのクラスにも一人はいておかしくないとされるLGBTの子どもたちの学校生活を安心できるものにするためのキーパーソンは、子どもなのです。

よく「子どもたちに性の多様性をどうしたら教えられますか」という質問を受けますが、そのカギは、大人たちが子どもたちと一緒に性の多様性を学ぶ方法を探り、子どもたちを「資源」であると肯定的にとらえることにあると私は考えています。

「課題」としての子どもの現状

私は、「にじーず」という一〇代から二三



「にじーず」の紹介ポスター

歳までのLGBT（かもしれない人を含む）の居場所づくりを二〇一六年から仲間たちと行っています。札幌、埼玉、池袋の全国三か所で、月に一度、いつ来てもいつ帰ってもよい場を無料で開放しています。

「にじーず」では、普段学校で話せないような性別についてのお話をしてほしいし、飼っているネコの自慢をしてもいいし、お絵かきやゲーム、レゴブロックで遊んでいるのもよく、参加者が安心して自由に過ごせる場づくりがされています。二〇一九年だけで約六〇〇名の利用がありました。

参加者が毎月の「にじーず」を心待ちにしている背景には、LGBTの子どもたちが安心して毎日を通ぐせず孤立しやすいという現実もあります。

先ほど、「子どもたちは上の世代よりも受容的」という話を書きましたが、同級生の心無い発言を耳にして人知れず涙している子も、学校に行けなくなっただ子もいます。性の多様性を考えるとき、子どもたちは「課題」でもあります。

日本の自殺者数はここ近年減少傾向にありますが、子どもの自殺は戦後最悪レベルで増え続けています。厚生労働省の「自殺総合対策大綱」には、自殺のハイリスク

層として性的マイノリティがあげられ、偏見や無理解がその要因であるため、教職員の理解促進が重要であると書かれています。

また、宝塚大学の日高庸晴教授たちの調査では、一〇代のLGBTの子どもたちが希死念慮や自傷行為を含むメンタルヘルス上の課題を、その他の子どもよりも多く抱えていることが明らかになっています。LGBTが子ども自殺のハイリスク集団であるのは疫学的にはよく知られた話で、アメリカでも一〇代の自殺の三人に一人がLGBT当事者という調査があります。

「にじーず」の利用者の多くは、家族にも自分の悩みをなかなか話せない、理解されにくいと感じています。「にじーず」に来るのに「勉強に行く」と言ってカバンに参考書がたくさん入っている子、LGBTの集まりに参加することを親から「そんなところに行ったらおかしくなる」などと否定される子たちがあります。世界で一番言えない相手が家族、という話も珍しくありません。学校にも家庭にも居場所がなければ、子どもたちはいったいどこで、自分は愛されるべき存在なのだと感じられるのでしょうか。

性の多様性について学校が取り組まなければいけない理由の一つが「それが命の問題だから」という重たい事実、この連載を始めるにあたってまずは共有しておきたいと思います。

何歳から取り組む必要があるの？

ここまで、「にじーず」に来る中高生たちの話をしてみました。私はさらに低年齢の子どもたちや家族のグループの運営にもかかわっています。「にじっこ」は東京で年四回開催されている一五歳以下のLGBTかもしれない子どもと家族が集まれるサポートグループです。一五歳以下と聞いて、皆さんは何歳くらいの子どもたちを想像するでしょうか。なんと「にじっこ」の一番若いメンバーは五歳です。これを言うといつも驚かれますが、人が自分の性別について意識し始めるのは物心つく頃ですから、二〜三歳の子どもが性別違和を訴え始め、しばらく経って親御さんがグループを訪れるのは不思議なことではありません。

物心ついた頃からはつきりと「自分は男の子じゃない」「どうして髪の毛を切るの？」「ドレスやプリキュアがいい」と主張し、将来自分がお父さんのような体になるなら大人になりたいと言う子どもたちがいまいます。「息子だと思っていた子どもが、女の子として幼稚園や小学校に通えるようになった」という話が低年齢のグループでは出てきます。

保護者の方に理解があるケースでは、このように（もちろん迷いや葛藤はありつつも）子ども的人格が尊重され「自分は周囲に大切にされる存在なんだ」と子ども

もが理解できる環境の中で、性別違和のある子どもは育つていくことができます。しかし、ほとんどのケースはそうではないでしょう。「おかまなのか、やめなさい」と周囲の大人に叱責され、学校でもいじめられ、自分では恥ずかしいと思っているのに髪を短く切られたり、無理やり野球チームに入れられたり、その逆に、女の子らしい服を着ることを強制されている子どもたちもいます。一人ひとり性のあり方は違うこと、性別によつて自分が好きな遊びややりたいことを諦めなくてよいことは、幼い頃から伝えていく必要があります。

同性を好きになる人がいることについても、伝えるのに早すぎることではないでしょう。この世界は異性愛の家族であふれていて、絵本やアニメ、映画に出てくるカップル、教科書に出てくる家族も異性愛だらけです。初恋を三歳で経験する人も、八歳で経験する人も、一五歳で経験する人もいるでしょうが、そのときに同性愛者に関する肯定的な情報やロールモデル（お手本になる大人）がなければ「自分はおかしい人間だ」「同性を好きになるのは自分だけだ」と思い悩む原因になります。同性愛者をネタとして笑うコミュニケーション・パターンは小学生でも見聞きしていますから、それを打ち消すためにも、小さい頃から肯定的な情報を伝えられるとよいでしょう。

子どもたちの発達段階に応じて性の多様性をどのように伝えていくのがよいかというガイドラインは、す

でにユネスコやアメリカ性情報・性教育評議会などがまとめており、大変参考になります。

この連載では、年齢に応じてどのような伝え方ができるのか、具体的な絵本や資料なども追って紹介していきますと思います。

*

冒頭で、子どもたちは上の世代よりも性の多様性について受容度が高く、共感的な姿勢を示すことに触れました。一方、子どもを取り巻く環境のシビアさも紹介しました。この両方の側面を見つめながら、教師がまずは性の多様性について勉強し、日頃の言動を振り返ることが、誰もが安心して学べる学校づくりにつながっていきます。これは低年齢の子どもと接する際にも心がけておきたいことです。

次号では性の多様性の基礎知識について解説します。また来月お会いしましょう。

〈参考・引用文献〉

- Hidaka, Y. D., Operario, M., Takenaka, S., Omori, S., Ichikawa and T. Shirasaka (2008) "Attempted suicide and associated risk factors among youth in urban Japan," *Social Psychiatry and Psychiatric Epidemiology*, 43, pp752-757
- 日高庸晴・三重県男女共同参画センター共同研究（二〇一八）「多様な性と生活についてのアンケート調査報告書」フレンテみえ
- 釜野さおり・石田仁・風間孝・吉仲崇・河口和也（二〇一六）「性的マイノリティについての意識―2015年全国調査報告書」科学研究費助成事業「日本におけるクィア・スタディーズの構築」研究グループ（研究代表者 広島修道大学 河口和也）編